特254
930

（昭和十一年十一月二十七日
石油國策論集附錄）

寄贈

直ちに燃料省を新設せよ

長谷川尚一

始

特254
930

拙著頒布について

長谷川尚一

拙著石油國策論集を汎く官民各方面に頒布せるに對し知名有力なる諸賢から續々賞讃激勵の書を寄せられたことは著者の光榮として感謝に堪へざる所であるが飜つて思ふに拙著の内容は三十年來終始不變同一の論旨を反復せるに過ぎず然も今日更に三十年來の舊說を集錄してこれを公にせる所以は我國の石油事業が三十年前に比して格別進步發達の見るべきものなく國家本位の石油國策さへ樹てられて居ない憂ふべき狀態を默視し得ないが爲めに外ならぬのである

拙著の價値如何に拘らず燃料國策の根幹たる石油政策が國家存亡の重大問題たることに就ては最早何人も異議なきことを疑はない著者は勿論不文菲才文意の盡さざる點も誤謬も多々あると思ふが徒らに誇大の文字を列ね實行不能の空中樓閣は決して描いて居ない積りである此義に於て拙著に對し誤謬を指摘し啓蒙の語を寄せられんことを待望して止まないのである蓋斯くの如きは不敏を顧みず三十年來邦家の爲めに石油國策樹立の必要を唱へて來た著者に對する無上の好意であり親切であると信ずる尚拙著に關し質議を有せらるゝ諸賢に對して著者は喜んで應答說明の勞を惜まぬ考である

直ちに燃料省を新設せよ

長谷川尚一

回顧すれば大正九年第四十三臨時議會に於て、八億五千萬圓の海軍擴張費が可決せられ、有名な八八艦隊が建設されることになつた。

然るに當時我國の石油年産額は僅かに三十萬噸にして、我艦隊三日間の活動を支ふるに過ぎず、八八艦隊が出來上つても、これを動かす石油なく、動力がなければ切角大金をかけた八八艦隊も、無用の長物に過ぎざる情勢であつた。茲に於て余は石油政策の樹立、並に國内油田の開發に關する建議案を、親友代議士坂本素魯哉氏を通じ議員松田源治氏外六十名の贊成を得て、第四十三臨時議會に提出し、議會は「政府ハ速ニ燃料政策ヲ樹立スベシ」と滿場一致を以て可決した。

依つて余はこれが實行案として、第一石油國策論を發表し

著者寄贈本

一、政府は速に我國内外の勢力圏内に於て未開坑油田開發に關する豫算を計上し來る第四十四議會に 提出し 之が開發に關する 一切の件を海軍省に 於て處理する事

一、海軍省は民間石油業者に對し新油田開發作業を囑託し其經費の半額を出資すること

一、開坑油田の出油鑛區は政府に於て相當の代價を以て買收する事を得るものとすといふ私案を提げて、兩院議員並に政府當局に力説し、各方面の諒解を得た。而して憂國の還良は、熱心に本問題を研究熟議するに至り、政友會はこれを政務調査會の議に附し、特別委員附託の下に審議の結果、余の第一石油國策に述べた私案と略同一の決議を爲すに至つた。

此頃まで我國官民の石油に關する智識は、洋燈時代と相去ること遠からず、國内の石油需要量も甚だ少なかつたから、石油事業の管理も農商務省で差支なかつたが、世界の大勢は疾くに石油時代に進み、列國は石油爭奪戰に火花を散らして居るのであつた。即ち英國は海軍に於て石油事業を管理し、伊太利は陸軍に於てこれを管理するといふ情勢であつた。我國に於ても八八艦隊の燃料として必要な、數百萬噸の石油問題を解決せんが爲めには、當然數億圓の國内油田開發費を要し、假令農商 務省の手でこれを豫算に計上して見た所で、斯かる大きな金額が取れる筈もなかつた。依て余は便宜案として、八八艦隊を動かす丈けでさへ、數百萬噸の石油を必要とする海軍をして、國内油田開發の衝に當らしむるを上策と考へた。即ち其實行策として議會並に政府當局に對し「政府は速に我國内外の勢力圏内に於て未開坑油田開發に關する豫算を計上し來る第四十四議會に提出し、之が開發に關する一切の件を海軍に於て處理すること」を建議した。而して海軍も亦余の説を容れ、軍令部より國内油田試掘に關し民間當業者の負擔すべき豫算を提出すべきことを命ぜられた、依つて余は民間當業者と協議し、余これが代表として、國内油田開發費壹億圓年額二千萬圓の内差當り民間の負擔金八百五十萬圓の豫算を軍令部に提出した。然るに一二有力當業者は、國内油田の開發よりも、寧ろ海外油田を獲得するに若かずとなし、政府の出資を得て、ボルネオ

の石油鑛區の買收を策したが、商談不成立となり、切角軍令部へ提出した八百五十萬圓の豫算も、終に實現するに至らずして、有耶無耶に葬り去られたのは誠に千秋の恨事であつた、當時これが實現して、國內油田の開發が海軍に委ねられて居たならば、今日の石油國難を免れて居つたであらふと思ふと、實に遺憾に堪へないのである。

斯くて石油問題は依然農商務省の管理に屬し、後に商工省に移つて、その一局部に管掌せられ來つた爲めに、一として國家の大局に達觀せる施設の行はるゝを見ず、爾來我國の石油事業は時に盛衰はあつたが、大體二十年前と大差なき狀況を繰返して今日に至つた。

最近代用燃料の製產が實現するに至つたことは、慶賀すべきであるが、世界の大勢は急速度に進展して、今や燃料問題か直接一國の死命を制する大勢となつた。而して我國は燃料問題に闢し多年の不用意に禍されて、立ち後れとなり、國家の危急愈々眼前に迫つて來た。

即ち今にして燃料問題を解決せぬ以上、數十億圓をかけた陸海の軍備も全く其實力を發揮し得ざるのみならず、商工業運輸交通其他百般の事業に於て、世界の大勢に追從して行くことが出來ないのである。燃料問題が斯くの如く國家の存亡に闢する重要政務となつた今日、最早商工省の一局部の管掌に委ねて置くが如き、時代錯誤には、一日も滿足して居られぬ情勢となつた。

玆に於て余は本年十一月十日、政府當局並に樞密院、貴衆兩院に對し、左の建議を提出した。

「內外の情勢に鑑み燃料國策の樹立並に實行は愈々以て一日を緩ふすべからざる急務たることを痛感仕候就ては此際直ちに燃料省を御新設相成候樣致し度邦家の爲め至誠を以て奉建議候」

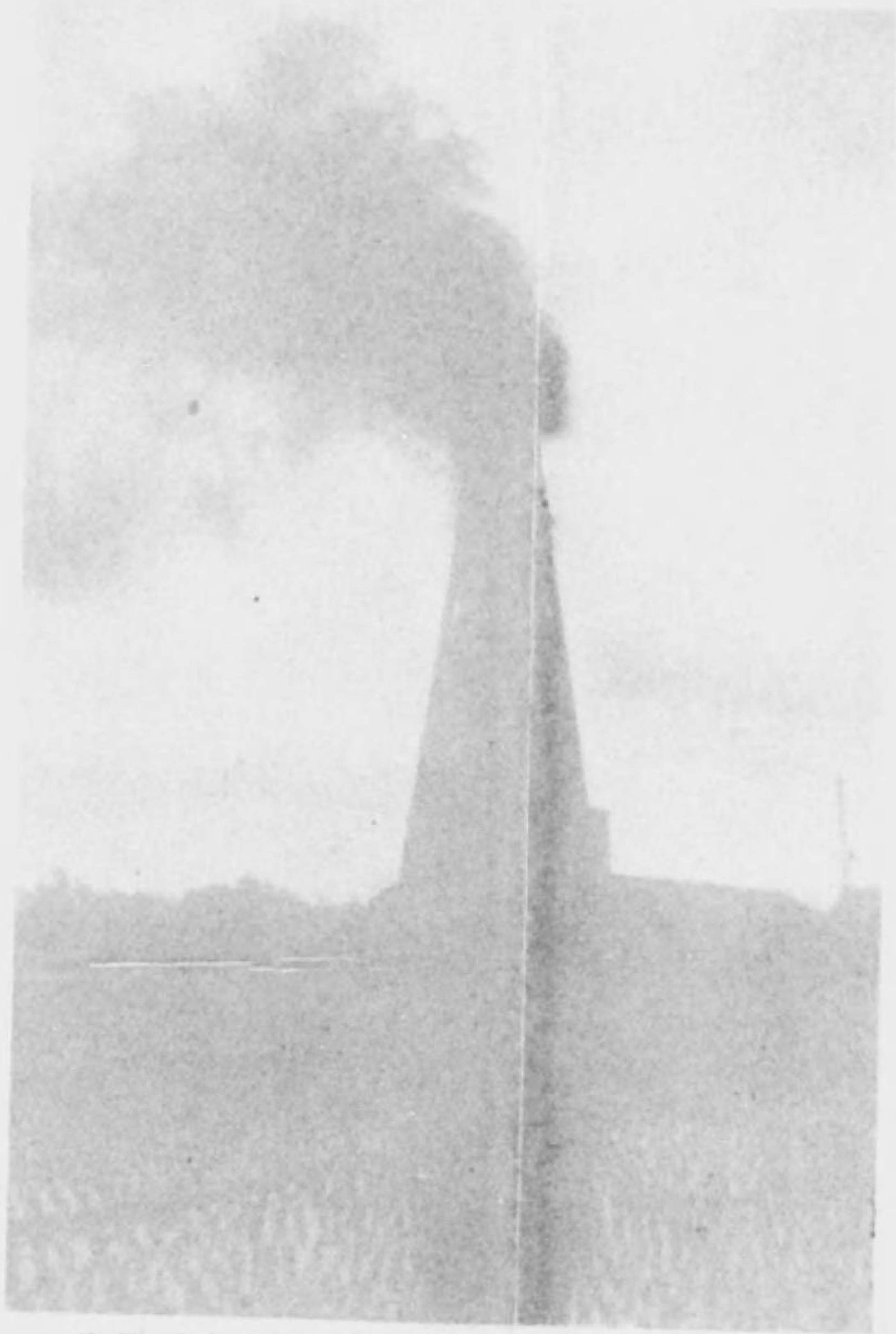
燃料國策の解決焦眉の急たる今日直ちに燃料省を新設し識見卓越せる大臣をして他の掣肘を排して燃料國策を斷行せしむる必要あることを天下に訴ふる所以てある。

黒煙、天に冲し　轟々、地を搖がす

（昭和十一年十月二十三日北越新報切拔）

南蒲大口の瓦斯試掘井　けさ、猛烈な大爆發

日本鑛業株式會社が本年五月以來南蒲原郡中之島村大字大口に瓦斯採取の目的を以て試掘中の大口第一號井が廿二日午前九時三十五分頃俄然大音響と共にメタン瓦斯を猛噴し轟々耳を聾する叫びをあげつゝ土砂を噴き上げ櫓の腰板を飛ばし黒煙天に冲する壯絶な光景を呈し附近は見物人の黒山を築いてゐる井戸の深度は五百八十二米突六吋の鐵管を以て掘鑿を進めてゐたのだが一晝夜三千萬立方呎以上と見らるゝ猛噴で噴出の剎那十二間の櫓の上にあつた三百貫ばかりの鐵管沈壓の鐵材を十間あまりも空中高く吹き上げた物凄さ附近は盛んに落ちてくる砂礫のためにすつかり變色し危險で坑口へは近寄れない。（寫眞は轟然噴き出した大口の瓦斯坑井今朝撮影）



猛烈な大爆発

南浦大口の瓦斯試掘井

轟々地を揺がす
黒煙天に冲し

（昭和十一年十二月三十日 北越新報切抜）

燃料省新設に關する建議

内外の情勢に鑑み燃料國策の樹立並に實行は愈々以て一日を緩ふすべからざる急務たることを痛感仕り候

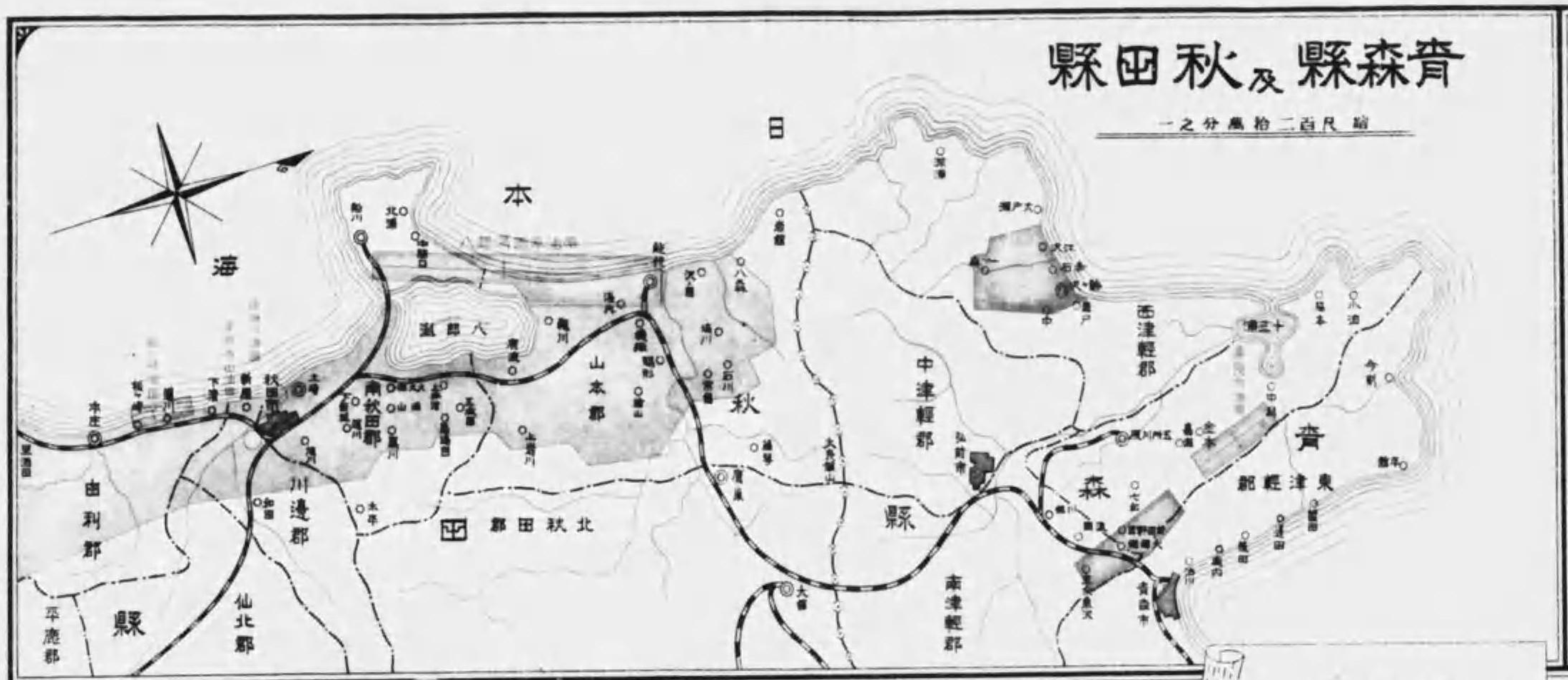
就ては此際直ちに燃料省を御新設相成候様致し度邦家の爲め至誠を以て奉建議候

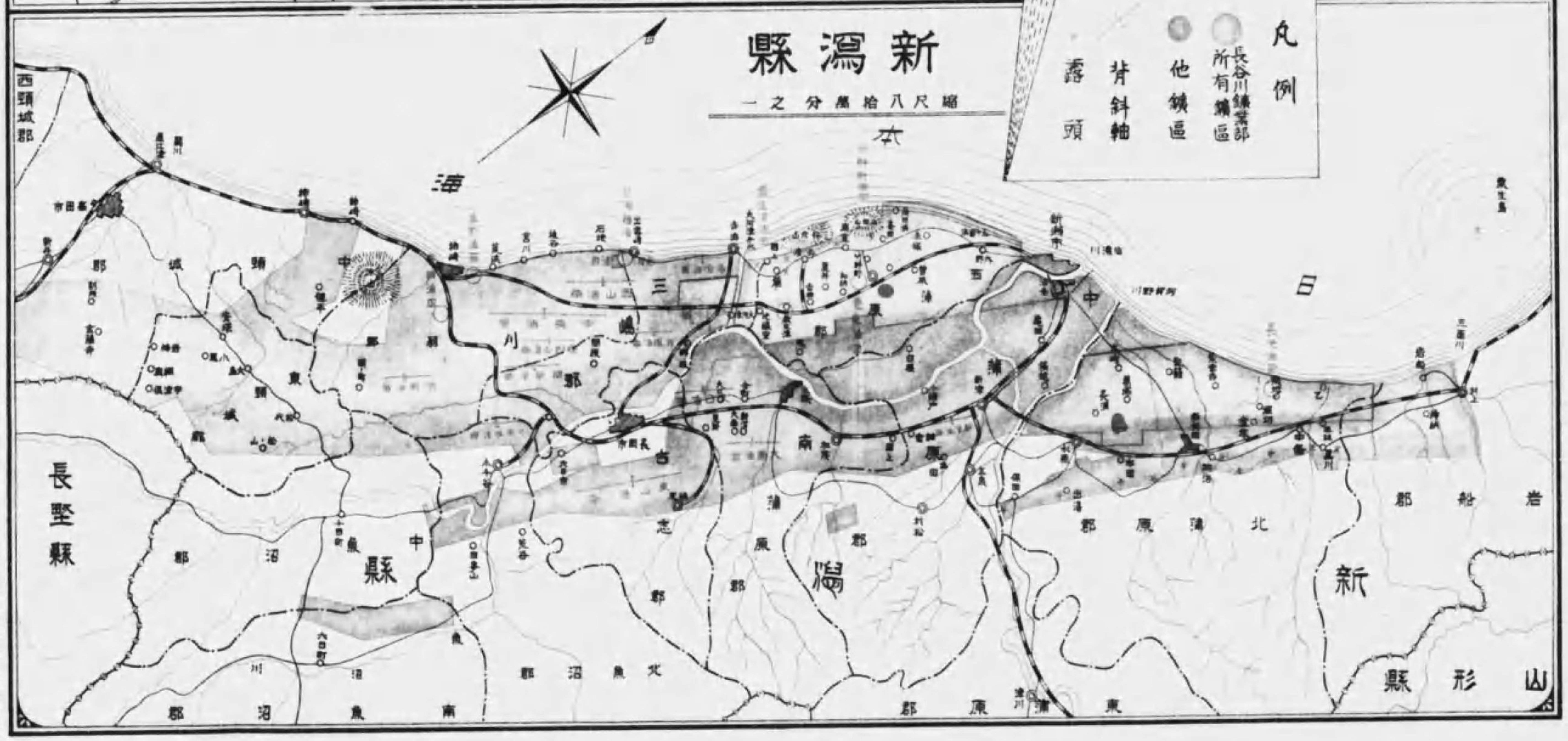
昭和十一年十一月

長谷川尚一

陸軍參謀總長　閑院宮殿下
海軍軍令部總長　伏見宮殿下
内閣總理大臣　廣田弘毅殿
外務大臣　有田八郎殿
内務大臣　潮惠之輔殿
大藏大臣　馬場鍈一殿
陸軍大臣　伯爵寺内壽一殿
海軍大臣　永野修身殿
司法大臣　林頼三郎殿
文部大臣　平生釟三郎殿
農林大臣　島田俊雄殿
商工大臣　小川郷太郎殿
遞信大臣　頼母木桂吉殿
鐵道大臣　前田米藏殿
拓務大臣　永田秀次郎殿
樞密院議長　男爵平沼騏一郎殿
貴族院議長　公爵近衞文麿殿
衆議院議長　富田幸次郎殿

長谷川鑛業部所有鑛區一覽圖





大正五年十月長谷川鑛業部調査作製

平原油田開發の機運愈々到來す

日本鑛業株式會社先づ越後大口
第一號井に第一發の狼烟を揚ぐ

國内油田の開發が、我國石油國策の根幹たることは、拙著石油國策論集に、反復詳論した通りであるが、然らば國内油田の開發は、何れの方面を先にし、主力を注ぐべきかといふに、余は先以て平原油田を開發すべきことを主張する、これ蓋し余の三十餘年來不變不動の信條である。

由來我國の石油業者學者は、平原油田の價値を輕視する傾があつた。然し米國、露西亞、ルーマニヤ、メキシコ、ガリシヤ等の大油田は、何れも坦々たる大平原にして、日產何萬石といふが如き世界石油史上に有名な大油井の多くは、平原油田に出現したのである。

從來余は我國石油史に特筆せらるゝが如き大油井は、必ず平原油田に出現すべきことを確信して居た。果せる哉秋田平原雄物川畔の油田が、昨年來俄然活氣を呈し、我國石油史に一新紀元を劃する產油を見るに至つたことは、邦家の爲めに慶賀に堪へざる所であつて、次に來るべき大量噴油の吉報は必ず越後大平原の油田からでなくてはならぬ。

元來越後大平原の油田は、其面積に於て秋田平原の油田に數十倍せるのみならず、越後大平原の油脈は、高地油帶の西山油帶、中央油帶、小千谷油帶、東山油帶等から大小の油脈が平原地帶を貫通し、其分布數十里に及び、到る所瓦斯發噴し且油を伴ふ處あり、古來越後七不思議として傳へらるゝ地域であつて、將來必ず此方面に大油井の出現すべきを疑はないのである。

先年日本石油株式會社の越後高町油田第二號井は、日產五千萬立方呎といふ世界に稀なる大量の瓦斯を噴出し、續いて三號井四號井五號井、何れも大瓦斯噴出の爲に、坑井の進掘不可能となつたが、第八號井に至り漸く瓦斯層を貫通して大量の產油を見、終に大油田となつた。然るに隣鑛區の境界は、現今の鑛業法に於ては、距離十間なるが爲め競爭濫掘となり、出油次第に減少して、同方面の油業は、萎靡不振の狀態を持續して今日に至つた、蓋隣鑛區距離接近の爲めの競爭掘の弊は、到る所これを見るのであるから、宜しく鑛業法を改めて、隣鑛區距離を百間に延ばす必要ありと信ずる。

然るに本年十月二十二日、日本鑛業株式會社の越後南蒲原郡大口鑛區第一號井は、俄然瓦斯噴出し其量一晝夜三千萬立方呎以上と稱せられ、轟々たる音響と共に、黑烟天に冲する壯觀は、別項北越新報報道の通りであつた。此の大口鑛區は、曾て余の所有に屬せる鑛區の一部を、資金の關係上、日本鑛業株式會社に讓渡せるものであるが、今回の大瓦斯噴出は、越後大平原油田の價値を確證せる狼烟が、先づ日本鑛業株式會社によりて打揚げられたものであつて、余が三十餘年來唱道し來つた越後大平原油田の開發を命ずる神啓であると思ふ。

余は石油事業に從事せんとするに當り、第一に連絡地質實測調查圖の必要を痛感し、自らこれを作製せんと決心し、新潟、山形、秋田、青森四縣に

渉り、大日本帝國陸地測量部地圖【參謀本部五萬分の一地圖】に、農商務省地質調査所作製の部分的調査圖を配植し、更に余の實地踏査研究せる材料を配置して、作製せるものにして、必ずしも完全無缺なりと言はざるも、當業者の指針として正確に近きものたる自信を持つて居る。故に余の越後大平原油田の價値を明言するのは、決して漫然たる第六感的斷案ではない。即ち本論附屬の新潟縣、秋田縣、青森縣内に於ける長谷川鑛業部所有鑛區一覽圖は、余の苦心作製せる連絡地質調査圖の一部にして、余は此の調査を根據として、越後大平原油田の有望を斷定するのである、論集第二號圖秋田油田調査圖も亦同様である。兎に角秋田雄物川油田の成功と言ひ、日本鑛業株式會社の越後大口坑井の成功と言ひ、何れも現實に余の調査圖の正確なることを立證して居る點に於て、何人も異議なき所であると信ずる、此地質連絡圖の有效性に鑑み、余は我國石油業發展の爲めに、三十餘年來その必要を唱へて來た全國に渉る國定連絡地質調査圖の一日も速かに出現せんことを祈つて止まないのである。

今や越後大平原油田開發の機運は正に到來した。此好機會を逸せず、官民協力その開發に從事せば、大油田の出現期して待つべきことを、斷言して憚らないのである。

342
973

終